

あの頃のこと

一

これは機があつたら一度書いて見たいと思つてゐたが、当時のノートも雑誌も其の後の転居の度々にあらかたに失してしまつたし、多少残つてゐるかも知れない心覚えのものも、今何処へ入つてゐるか解らない。強いて書けば、この数年の変転にともすれば薄れか、らうとする記憶を継ぎ合すより仕方がない。

あの頃といつても、曲水創刊の年だから、大正何年か、何でも、今上御即位の大典があつた翌年だと思ふ。

どうして御大典といふ事を覚えてゐるかといへば、当時国許の親戚の者達と住んでゐた麻布我善坊町の家が解散する事になつて、尤もその家とて、学生三人に女中一人の離合もとより簡単なものだった。一人は中学生で、一人は大学院へ通つてをり……今思ひ出せば、この一人はこの八月公試運転中沈没した潜水艦に設計技師として乗込んでゐて、瀬戸内海の底で死んでゐる。漸く始めか、つた私の文芸俱樂部級の俳句を、時々冷かしてくれただつたが……残る私は、紺飛白に袴をつけそれに烏打帽か何か、兎に角学帽といふものを冠れず、歩き悪い板裏草履といふのを履いて、予備校と稱する奇妙な教室へ通ふか図書館へ日参するかして、学生とは言ひ條、随分肩身の狭い受験生といふ身の上だった。で、其処が急に解散といふ事にな

つた、め、私は私で早速何処かへ住居を見付けねばならなくなり、それこれで折柄御大典を控へたお祭騒ぎの東京を後に、一と先づ郷里へ帰り、御大典の当日は、正午のドンを合図に誰でも万歳を唱へるといふ事になつてゐたから、私は、床の間に向つて立つ父の後ろで、同じく万歳とやると、一緒のつもりでドンが後から鳴つて、一寸妙な氣持だった。そんな事で、御大典といふ記憶が、當時を思ひ出す度について廻るものらしい。

滞郷数日、また上京して私が厄介になつたのが、後で知つてみると結城史耕氏の家だった。古本屋さへ見掛ければ飛込んで行つてホトトギスの古いのを買集めにか、つてゐた時分の私だったから、それらの処々に史耕氏の句や絵が見付かりたりしたので、その麻布市兵衛町の崖上にあつた二階で、私が俳句に凝りだしたのは当然だった。文芸俱樂部級が、どうやら当時沼波瓊音氏が主宰してゐた俳味級位には進んだらしい。旧の、遠慮なく誰でも行けたホトトギスの牛込船河原町の例会へもその頃から行きだした。そして、同じ会のくづれの電車の中から、嚴ましさうな顔をした庄司瓦全氏を識り、予ねて話をして見たいと思つてゐた小田島樹人君にも親しくなり、やがて翌年の夏には学生だった久坂花囚君など、も知合つた。

史耕氏は当時あまり俳句はやらなかつたが、当時、私が欲しくてたまらなかつた——秋風や机の上の小人形 水巴——といふ銀の程よく燦んだ短冊だけはその書齋の柱に懸けてゐて、大分それが御自慢だったし、まだ私が識らなかつた、水巴先生の噂などちよい／＼聴かしてくれたり、一度その曲水吟社の俳句